

第4学年国語科の実践

- 1 単元名 人物の心の動きを読もう
「ごんぎつね」(新美 南吉作)

2 単元目標

- 叙述から想像を膨らませて読み、読み取ったことを進んで話し合おうとする。(関心)
- 場面の移り変わりや情景、登場人物の心情を叙述をもとに想像しながら読むことができる。(読むこと)
- 課題について自分の考えをまとめ、一人ひとりの感じ方に違いがあることに気づき、考えを深めることができる。(読むこと)

3 『ひびき合う子どもたち』をめざすための指導の工夫

- 研究課題…切実な問題意識を持ち、友達と関わり合いながら学習する子どもの育成
- 手立て…子どもの「切実な問題」を見取った授業作り

(2) 単元と指導について

① 教材について

本単元は、新学習指導要領「C読むこと」の目標「目的に応じ、内容の中心をとらえたり段落相互の関係を考えたりしながら読む能力を身に付けさせるとともに、幅広く読書しようとする態度を育てる。」を受けて設定した。「C読むこと」の内容「ウ 場面の移り変わりに注意しながら、登場人物の性格や気持ちの変化、情景などについて、叙述を基に想像して読むこと」「オ 文章を読んで考えたことを発表し合い、一人一人の感じ方について違いのあることに気付くこと」を指導するのに適した単元である。

本教材は、十数日間のごんと兵十の関係を描いた物語である。ごんと兵十の他に出てくる登場人物は、加助だけで、物語自体はこの二人の心を通わせ合うまでの心のすれ違いを中心に展開する。いたずら好きでひとりぼっちの小ぎつねごんが、同じような境遇になってしまった兵十に共感し、償いをする中で心を寄せて行くものの、なかなか通じ合えず、死という極限においてようやく心が交流しあえたという哀愁に満ちた悲しい物語である。この作品の中に「兵十、ごめんね。うなぎなんかとって、あんたのお母さんが食べたがっていたのに、本当にすまなかった。」「いや、何もそこまで気にすることはない。」とこんな会話がもしあれば、死という悲劇は、起こるはずがなかった。しかし、ここでは、一方的にしか通じない、コミュニケーションができない人間と動物という関係がある。全く異なる境遇のために分かり合えない両者の関係の中に、それでも分かり合えるのではないかという「希望」のようなものがテーマとして描かれていると考える。

この物語は、「起・承・転・結」がはっきりした6場面で構成されており、時間や場所が具体的に書かれているので、内容がつかみやすい構成である。1～5場面までは、ごんの視点で書かれており、ごんが兵十に心を寄せていく行動が心情の高まり(後悔、同じ境遇におかれた兵十への共感、同情、同じ悲しみを共有するものとしての一体感や仲間意識、励まし、親愛)として表されている。6場面においては、視点が兵十に転換し、兵十の憎しみ、怒り、後悔が描かれている。視点が転換したことによって、ごんと兵十の心のすれ違いによって起こった両者の悲劇の結末を読むこととなる。最後の「青いけむりが、まだつつ口から細く出ていました。」の表現は、殺し殺された悲劇を美しいイメージとして描いている。

② 指導について

【子どもの「切実な問題」を見取った授業作りについて】

○ 学習過程の中で身に付けたい力と読みの方法

- ・ 物語の基本場面構成理解する力 <「時」を中心に場面を把握させる。>

本教材は、すでに6つの場面に分けられているが、第1次で「時」を表す言葉をもとに場面を確認する。それにより、場面の展開が分かり、話の大体の内容も把握できると考える。また、物語の基本的な構造については、冒頭・展開・山場・結末等の用語を教え場面が分けられることを理解させていきたい。

- ・ ごんと兵十の心情の変化を心内語・中心人物と対人物の関係から読み取る力、主題を考える力

物語は、中心人物の大きな変化によって完結する。その中心人物に影響を与える対人物も含めて、登場人物の気持ちの変化を丁寧に読み取ることは、重要である。この教材は、中心人物の性格や物語の出来事を捉えるだけでは、子どもたちに読み取ってほしいと考える兵十に対するごんの思いの高まり、ごんと兵十の思いのすれちがい、心が通えた嬉しさ、兵十の後悔等を読み取ることはできない。

そこで、第2次においては、物語を通して、ごんの心情の変化を中心に兵十の立場からも心情を想像させていく。ごんについては、くりやまつたけを持って行ったのは、いたずらの償い以上の思いを込めていたことを想像させたい。兵十については、5場面を中心にくりやまつたけを持ってきた者についてどのように思っているかを捉えさせたい。

<課題を設定し読み取る>

初発の感想交流をもとに単元を通して「ごんと兵十の気持ちの変化を考えよう」とめあてを持たせた。感想が多く集まっているところ、教師が読み深めたいところでの課題提示をし、読ませていきたいと考える。子どもたちの思いがにつながるような課題を考えていきたい。

本時では、初発の感想で半数の児童が思いを持った最後の場面を扱い、読みを深めたい。ごんが兵十に打たれた衝撃が子どもたちにとって大きい故に感想が多いと思われるが、子どもたちの意識がその場面に向かっているとも言えるので、問題意識を持って読むことができるであろう。子どもたちの初発の感想を見ると、「ごんは、兵十に打たれてしまってかわいそう。ごんが打たれて悲しい。」「兵十は、ごんを打ってひどい。」と異化した客観的な読みに残っている。これを両者の関係から「ごんは、兵十に自分の償いに気づいてもらえて嬉しい。でも、友達になれずに死んでしまうのが悔しい(悲しい)。」「兵十は、一人になった自分のことを思ってくれたごんを殺してしまい、後悔した。」という想像に変容させていきたい。

「ごんと兵十は、分かり合えたか。」という課題を提示することで、叙述をもとにごんと兵十の気持ちを考えさせたい。兵十の「ごん、おまえだったのか。いつも、くりをくれたのは。」と言ったときの気持ちやその言葉に対して、ぐったりと目をつぶったまま、うなずくごんの気持ちをそれまでの心情の変化を含めて考えさせることができるのではないかとと思われる。そして、作品全体の出来事に即した「ごん」と「兵十」の関わりから想像させたい。

第3次においては、この物語を通して作者が伝えたかったこと、作品が自分に最も強く語りかけてきたことを考えさせていきたい。できるだけ簡潔な言葉で書かせ、その言葉の理由をまとめさせたい。例えば、「分かり合える喜び」「変えることのできない現実」等。自分の考える主題と友達の考える主題の共通点や相違点から、読みの交流をし、自分の考えを深めさせていきたい。

第4次では、新美南吉のほかの作品や狐が出てくる話などに読書を広げたい。子どもたちは、物語文を読んでいるものの面白い話やこわい話などが多いので、感性が揺さぶられるような作品へと出合わせていきたい。

○ ひびきあい・・・話し合いで学習を深める

課題に対しての自分の考えを持つことが最も大切である。自分の考えに自信が持てないと思っている児童も多いため、自分の読みを持つ時間を重視する。そして、その考えをお互いに出し合って、より深い読みにさせていきたい。単に想像だけの話し合いにならないために、叙述に即して具体的に話し合いが進むように指導していきたい。

1時間の中で、「自分の考えを話し、伝える」という活動をペア対話やグループ交流を設定することで、行っていきたい。実際に話すことで、自分の読みが明確になっていく。書かれたものを読むのではなく、相手の目を見ながら話し、聞き手は、友達の考えに反応したり、感想を言ったりできるようにしたい。友達の良い考えは、自分の中にも取り入れていくようにさせる。

全体交流では、個の読みが表出でき、聴き合う姿が見られると良い。友達の考えを受け入れたり、新たな気づきを持てたりする姿を「ひびきあう姿」と考える。

本時は、対立の課題ではあるが、結論を一つに決めるのではなく、叙述をもとに意見を重ね合わせていく話し合いの姿をイメージしている。子どもたちが真剣に考え、伝えたいような場面が見られるとよい。また、全体交流の後に本時の学習のまとめとして、自分の考えを書く。話し合いを通して、自分の読みが新たに作られることで、個の読みが高まったと捉えたい。

4 単元指導計画

次	時	ねらいと学習活動	評価基準と評価方法
一	1 2 3	○ 教材に興味を持ち、学習の見通しを持つことができる。 ・題名読み。全文通読。初発の感想(感じたこと・心に残ったこと、みんなで考えたいこと)を書く。 ・登場人物、中心人物・対人物。物語の設定の確認をする。 ・音読練習。新出漢字や語句の確認をする。	【関】・題名に興味を持ち、教材文を読もうとしている。(発言・観察) ・話に興味を持ち、感想を持っている。(発言・観察) 【読】・登場人物、物語の設定、あらすじ、誰の会話文かがわかる。(ノート・発言・観察)
二	4 5 6 7 8 9	○ 登場人物の心情の変容を心内語や情景描写から読み取る。 ・1場面を読み、どんなきつねかまとめる。 ・いたずらを後悔した、ごんの最初の心情の変化を読み取る。 ・償いを始めたごんの心情の変化を読み取る。 ・兵十と加助の後をついて行くごんの心情を読み取る。 ・償いを続けたごんの心情を読み取る。 ・ごんと兵十は、分かり合えたのか話し合う。(本時)	【関】読み取った内容を進んで伝えようとしている。(観察) 【話・聞】自分の考えを分かり易く話している。友達の考えを自分の考えと比べながら聞いている。(観察・発言) 【読】(ワークシート・発言・観察) ・ごんはどんなきつねか ・いたずらばかりしていたごんは、どこでどう変わり始めたのか。 ・ごんは、どうして何度もくりやまつたけを持って行ったのだろうか。 ・ごんはどんな気持ちでくりやまつたけを持って行ったのだろうか。 ・ごんは、どんな気持ちで兵十と加助の後をついていったのだろうか。 ・神様と聞いたごんは、どんな気持ちだろうか。

			・ ごとと表十は、分かり合えたのか。
三	10 11	○ 作品に対する自分の考えを深める。 ・ 作品を通して作者が伝えたかったこと（主題）について、交流する。	【読】 作者の思いや願いについて、自分なりの考えを持ち、友達の考えとくらべている。（ワークシート・発言）
四	12 13	○ 同一作者の作品や狐が出てくる物語を読み、紹介カードに書く。	【関】 同一作者の作品や狐が出てくる物語を進んで読もうとしている。（観察） 【読】 作者の思いや願いについて考え、作品についての感想を持てる。（紹介カード）

5 本時について

（1）本時目標

兵十の心情の変化、ごんの言動や様子を叙述に即して想像して読み、個々の感じ取った内容を話し合うことを通して、兵十とごんの心の交流を読み取ることができる。

（2）本時展開

学習活動	指導上の留意点（◇評価）
1. 前時の学習を想起する 2. 学習課題について確認する。 ごとと兵十は、分かり合えたか。 3. 本時の学習場面と前時の学習場面を音読する。 4・課題に対して自分の考えをまとめる。 5. 考えを交流する。 【分かり合えた】・くりが固めておいてあるのが目につき、ごんが持ってきてくれたことが兵十に分かった。 ・ 兵十が「ごん、おまえだったのか。いつも、くりをくれたのは。」と聞いて、ごんがうなずいているので分かった。 ・ ごんは、兵十が「ごん、おまえだったのか。」と聞いてくれて、自分がしたことを分かってくれたのだと思い、とても嬉しかったと思う ・ 「ごんは、うなずきました。」のところで、兵十が初めて自分に声をかけてくれて、近くにいることを感じて、満足してうなずいていると思うから。 ・ 兵十が「火なわじゅうを、ぱたりととり落しました。」で、がっくりとした気持ちで、取り返しのつかないことをしたと思ったから。 ・ 兵十は、神様の仕業だと思っていたけれど、一人になった自分をあわれんでくれたごんの気持ちが分かったと思う。 ・ 兵十は、ごんが自分のためにつくしてくれことがわかった。本当に一人ぼっちになってしまい、ものすごく後悔したと思うから。 ・ ごんは、自分が持っていたことを知ってほしかったので、それを兵十が分かってくれたのだから、分かり合えたのだと思う。 【分かり合えない】・兵十は、くりをごんがくれたことは、わかったし、とんでもないことをしてしまったとは、思っているけれど、ごんが、友達になりたかったという気持ちは、わからないと思う。	・ 前時までの学習を想起しやすくするために掲示をしておく。 ・ ごんの「つまらないな」「引きあわないなあ」と兵十に対する思いと兵十の誰の仕業か不思議がっている思いを想起させる。 ・ 全体で音読するが、自分の読み方で音読するようにさせる。 ・ ごん、兵十の行動や会話文に着目させて、心情の変化を読むようにさせ、課題に対する自分の考えを見直す。 ・ ペアで交流し、自分の考えを表現させる。聞き手は、反応したり感想を言ったりできるようにする。ペアの友達の考えで、なるほどと思った内容は、自分の考えに付け足していくようにする。 ・ 全体で交流をする。 ◇自分の考えを伝えようとしている。友達との共通点や相違点に気付くことができる。（話・聞） ◇前の場面と関連つけて、叙述を基に理由を考えようとしている。（読む） ◇ごとと兵十の思いを関わらせながら理由を考えている。（読む） ・ 自分の考えを述べるだけでなく、友達の考えの良いところや友達の考えを聞いて、感じたことなどについても交流させる。 ・ ごんと兵十の二人の気持ちを考えさせていく。 ・ ごんが分かってもらったこと、兵十が分かったことはどんなことかをはっきりさせていく。ごんは、どうして償いをしたのかを振り返らせる。 ・ 「ごんは、うなずきました。」のところのごんの気持ちを深めるようにする。 ・ 答えを一つに絞らず、叙述を基に理由を考えられたこと評価していく。

・「青いけむりが、まだつつから細く出ていました。」からごんの命が消えそうな様子で、ごんが死んでしまうのだから、本当の気持ちを聞くことは、できなかったと思う。 ・ごんが償いで持ってきたことは、分からないと思う。 ・ごんは、自分がしたこと兵十が気づいてくれて、嬉しかったと思うが、死んでしまうので、悔しい気持ちが強かったと思うから。	
5. ごんと兵十についてどう思ったかまとめる。 本時の学習を振り返り、ごんと兵十に言ってあげたいことまとめる。 6. 次時の学習内容を知らせる。	・ごんと兵十について（課題に対する）自分の考えをまとめさせる。 ・主題を考えていくことを知らせる。

(3) 本時の具体的な評価

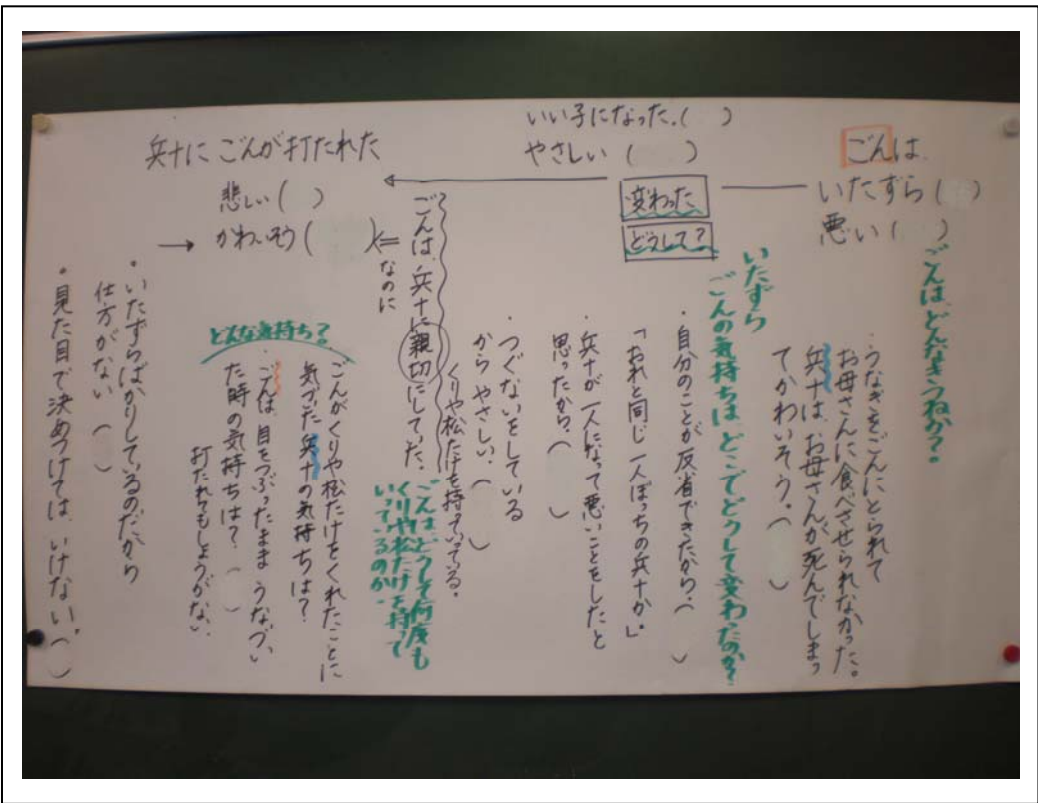
	◎ 十分に満足できる	○ おおむね満足できる	努力を要する場合の手立て
読む	兵十の心情の変化、ごんの言動や様子を叙述に即して想像して読み、前の場面や両者の思いを関連づけながら読み取ることができる。	兵十の心情の変化、ごんの言動や様子を叙述に即して想像して読み、兵十とごんの心の交流を読み取ることができる。	話し合いで出された意見を板書から選んで、ごんと兵十の心の交流ををまとめられるようにする。

6 実践を終えて

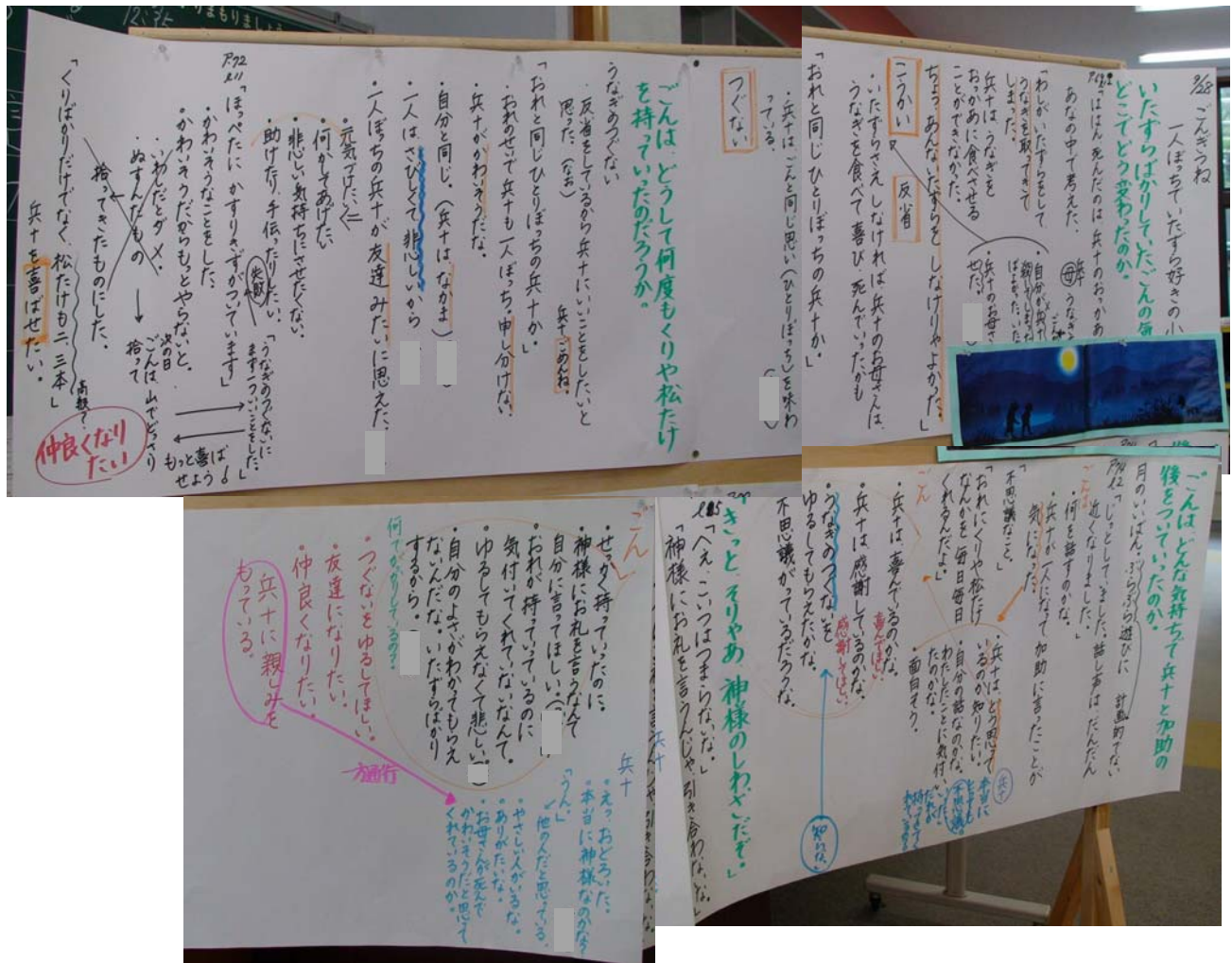
(1) 単元作りについて

① 初発の感想より読みの課題を作っていく

初発の感想交流の中で、「ごんは、最初いたずらで、悪いきつねだったけれど、優しいきつねになった。」「ごんは、自分のことを反省して、つぐないをするようになった。」等、ごんの変化に目を向けている。6場面においては、「ごんが兵十に撃たれてしまっかわいそう。」と異化した読みが大半をしめ、その中で「その時の兵十やごんの気持ちは？」と、どんな気持ちかを考えたいという意見が出ている。感想が集まったところを主軸にしなが、教師が読み深めたい内容を入れながら課題を作った。



② 本時までの授業の流れ



(2) 本時の授業について

【課題について】

6場面を読むにあたり、前時の流れからも考えて「ごんと兵十は分かり合えたか」という課題を設定した。5の場面までは、視点がごんにあてられているが、合わせて兵十の気持ちも読み取らせてきている。6の場面では、視点が兵十に転換されているが、ごんと兵十の両方の立場で考えさせ、前時までの学習をつなげて読み取らせたいと考えた。

指導案にも書いてあるが、本時の課題についての教師の読みは、「兵十がくりやまつたけを持ってきたのがごんであることがわかって、後悔している。ごんは、分かってくれて嬉しい。」という読みだけでなく、前時までに出ている「友達になりたい。仲良くなりたい。」を受けて、「撃たれてしまったことによって、ごんの気持ちは、かなうことができなかった。」だから、ごんは、「嬉しい」だけでなく、「悲しい、悔しい」という気持ちもあるという意見を引き出したかった。

本時では、兵十の気持ちは出てきたが、ごんの気持ちまでは、十分に読み深められていない。「ぐったりと目をつぶったままうなずきました。」のごんの気持ちの「うれしかった」に対して、揺さぶりをかけたり、前に戻って考えさせたりする手立てが必要であった。

本時の課題の「分かり合える」の意味が曖昧だが、「ごんと兵十の気持ちが分かり合えたか」、子どもたちは考えられていた。一人ひとりが自分の考えを持ち、根拠となる文章をもとに理由を考えることができていた。しかし、課題を考える思考の中で、6の場面の叙述に即して、順にここではまだ分かり合えていない、この文章で分かり合えた、最終的にはどうだったかと読んでいる児童と、順にではなく、分かり合えた（または、分かり合えない）と考える根拠となる文章を探し、理由を考えている児童の両方が見られた。そこで、本時の最初に、分かり合えた叙述には赤、分かり合えない叙述には青で線を引かせた。そして、順を追って考えさせ、最終的には、どのように考えるかをもう1度読ませた。教師は、課題に到達する中で、気持ちの変化も取り扱うことを考えていたが、子どもたちの多くは、課題に対する答えを求め、発言の仕方に迷っている様子が見られた。

(3) 成果と課題

- ・ 本時の板書では、発言内容を赤と青の丸で表し、課題に対する結果が、視覚的に捉えられるようにしたので、整理され分かりやすかった。赤丸が多く、最終的には、分かり合えたと結論つける結果となった。
- ・ ペア交流で、考えを伝え合うことができていた。
- ・ 子どもたちが言葉にこだわり、感じ方の違いを大事にする様子が見られた。友達意見を聞いて、認めたり、変容したりするひびき合いの姿が見られた。また、つぶやきが聞かれ友達同士で話し合おうとする姿が見られた。ごんに同化し、意見を重ねる様子が見られた。
- ・ 子どもたちが、読み進めたい、友達と話し合いと思うような課題の設定ができた。
- ・ 話し合いを深めるための切り返しの発問や話し合いの焦点化ができるように今後も教材研究を深めていきたい。